

はちのくま や しき  
蜂隈屋敷



蜂隈屋敷と武蔵村一帯を描いた絵図（『薦野家譜七巻』）

江戸時代、福岡藩の領地は、藩が直接支配する蔵入地と、藩主が家臣に与える知行地からなっていました。

知行地を与えられた家臣は、家老など上級家臣で、その土地の支配が認められ、自分の給料はそこから取れる年貢で賄いました。そして領地内には中心となる別業（別館）を構えて管理しました。

現在の筑紫野市武蔵にも、かつて家臣の別業があり「蜂隈屋敷」と呼ばれていました。

『筑前国続風土記』によると、福岡藩内には武蔵の他に、糟屋郡篠栗町、仙道（福岡市早良区内野）、三奈宜（甘木市三奈木）、大隈（嘉穂郡大隈）、志波（朝倉郡杷木町）が家臣の別業として挙げられています。

### 屋敷の移り変わり

御笠郡には江戸時代初期から家臣の知行地が置かれていましたが、その主は、たびたび変わりました。

まず、福岡に黒田長政が入部した慶長5年、御笠郡は小河内蔵允に預けられ、別業を天拝山麓の「帆足屋敷」という所に構え

ました。その子小河常章は、寛永16年（1639）に「山の口」という所に屋敷を構え、その養子の小河直常は、「蜂隈」という所を切り開いて別業を構えました。

しかし、小河氏は、延宝3年（1675）に御笠郡を没収され、それにかわって宗像郡を預かっていた吉田七左衛門増年が武蔵の別業に入りました。その吉田氏も貞享4年（1687）に領地を没収され、立花勘左衛門増弘が御笠郡6300石余の領地と、天拝山・武蔵温泉（現在の二日市温泉）を与えられ（注1）、立花氏の支配は幕末まで続きました。

### 蜂隈屋敷の様子

薦野立花家の系譜が記された『薦野家譜』には、江戸時代前期の蜂隈屋敷と武蔵村一帯の景観が描かれています。

絵図は東側（上古賀村）から眺めたもので、中心の高台にある少し大きな建物が蜂隈屋敷です。屋敷の内部はどのようになっていたかわかりませんが、立花氏の前に御笠郡を与えられていた吉田家の文書には「藩主が武蔵温泉に入浴し、武蔵の茶屋（蜂隈屋敷）に立ち寄られることもあろうから新たに御成座敷を作った」（注2）とあります。

蜂隈屋敷の背後には天拝山がそびえ、前面には馬場が通り、手前には家臣の屋敷が点々と見えます。ここに描かれている屋敷は、小河内蔵允の孫に当たる小河直常が開墾して造った屋敷を修築したもので、立花氏の家臣たちは、武蔵村及び近村に住み、武蔵村あるいは福岡の立花家の屋敷で勤務していました。

### 主人立花氏

蜂隈屋敷の持ち主である立花氏は、江戸時代になってから福岡藩に新しく召し抱えられた家臣で、以後、歴代にわたって家老職を勤めました。

立花勘左衛門増弘は御笠郡を預かったその翌年、祝儀として藩主を屋敷に迎え、その後も、たびたび藩主が立ち寄ったこともあり、元禄5年(1692)に800余石の加増を受け、御笠郡の惣郡司となりました。地元の人々は立花氏のことを殿方と呼んでいたそうです。

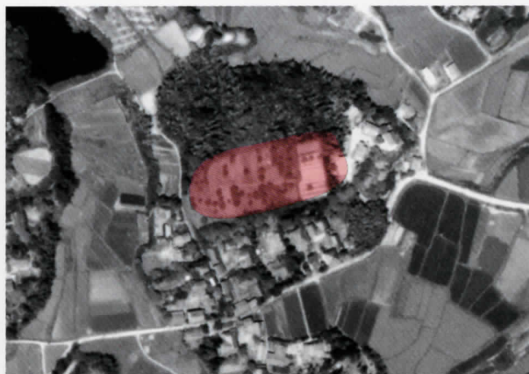
### 屋敷の管理

蜂隈屋敷の持ち主である立花氏は、福岡藩の家老でしたから、通常は福岡城内に住み、屋敷の管理や知行地からの年貢の取り立ては、武蔵村に在住する家臣たちがおこなっていました。家臣の一人吉井家に残る文書には屋敷の管理のことが記されています。それによると「建物の内外四壁廻りを常に監視し、足軽を使って屋敷内の掃除をし、竹木の育成に勤めて絶えず福岡の立花屋敷へ報告すること」(注3)と書かれています。

### 温泉奉行

立花氏が御笠郡を領した際、武蔵温泉の管理も任せられ、管理は武蔵村に在住していた立花氏の家臣である松尾氏が「湯奉行」として管理しました。立花氏が管理した武蔵温泉では、薬師湯や川湯を作って入りに来る人々からお金を取って温泉の管理費に充てました。

絵図右下に、柵を巡らせた建物が描いてあります。のちの「御前湯」に相当する施設



昭和36年の航空写真（赤の部分が蜂隈屋敷跡）

と思われます。御前湯は宝暦7年(1757)、立花勘左衛門が新湯を掘らせ、名づけたといわれています。(注4)

### 現在の蜂隈屋敷跡

蜂隈屋敷があった場所は、九州縦貫道によりかつての姿は失われてしまいましたが、付近には「御茶屋跡」の碑が建っており往時を偲ぶことができます。(有田和樹)



御茶屋屋敷跡の碑

〈注〉

- (1、2)『福岡藩吉田家傳録』
- (3)書状(御茶屋廻り之儀) 筑紫野市・吉井(不)文書22
- (4)二日市町役場『二日市小史』昭和29年

〈参考文献〉

- ・『筑紫野市史』下巻 1999年
- ・前田淑「福岡藩家老立花氏の家系」(福岡地方史研究会会報第16号所収)